スウェーデン便り（11）　　橋本白道（陶芸家）

［発行日］＝2000年2月1日

［本文］

重たいカメラを抱えて歩き回り、今日も、鮮烈な被写体に出あうことはなかった。

テンペリアウキオ教会の、祭壇すらも削ってしまった岩とガラスの空間に、シンプルな北欧デザインの行きつく果てを見た気がした。二一〇ミリのズームを通して、くまなく神の在所を探したが、無駄だった。彼はおそらく、この厚い岩の壁の裏側で、フォークとナイフを器用に使って、物静かに食事をしているのだろう。

空間に満たされないものを感じながら、二時間近くもそこに居たのは、美しい音楽のせいだった。重く、おさえた物悲しさが通奏低音のように鳴り響き、リリカルなメロディーの全体を、柔らかく包んでいる。長く、他国に占領され続けた国土の洩（も）らす嗚咽（おえつ）のような……。

教会を出ると、外は既に暗い。昼の三時に、夜と同じ暗さである。アンニッキ・カルヴィネンのブティックを覗（のぞ）く。手抜きのない手仕事の確かさと、ポッパナのあたたかさ、それがモダンな北欧の色使いと溶けあって、なんとも言えない。

ＣＤショップでサーメの音楽を探した。ヘルシンキでも、サーメの音楽はコーナーすらない。世界を席巻したケルト音楽のように近い将来、サーメのヨイクに陽（ひ）が当たる日が来るかもしれないというのに……。店の人に訊（たず）ねたら、「旅行者が次々に買い求め、ウッラのＣＤも、さっき売り切れてしまった」と言う。元々わずかな枚数しか置いていない。

アンドーラでは、ヒューマニティーというフランス映画を見た。なんとも惨めな男の日常を、映像は寄り添うことも突き放すこともなく、追い続ける。見終わったあと、いつまでも心のどこかに、糸の切れた釣り針のようにひっかかっている、そんな映画だった。

いつものように、ライブの聴ける店を探す。ジャズ・バーに行ったら、二百マルカ（約四千四百円）のチャージを要求され、ほかを探すことにした。年末はどこも特別料金なのだろう。結局、アイリッシュ・バーでライブを聴き、ビールを二杯飲んで、十二時前に店を出た。

港では花火が打ち上げられていた。仮設舞台で、若いグループのライブも続いている。カウントダウンが始まった。歓声が響き、酔った人々が、誰（だれ）かれなく抱き合う。私も頬（ほお）にキスされ、ハッピーニューイヤーと耳元に囁（ささや）かれた。その人が花火を指さし、「日本から花火師が来ています。美しい……、信じられないほど……」と言ったあと、私に小さな紙片を手渡した。そこにはフィンランド語と英語で、聖書の短い一節が書かれていた。

降り積もる雪の上を歩いた。グラニュー糖のように、さらさらとして白く艶（つや）やかに光る雪だった。イヤホンからはヨイクの唄（うた）声が響いている。混ぜ物のない、あまりに素朴な韻律。この雪のような……。私は小さな声で「キートス」と口に出す。

凍るように寒い。深夜二時。ヘルシンキ・ミレニアムの夜は更けてゆく。

《注》アンニッキ・カルヴィネン＝デザイナーの名前▽ポッパナ＝木綿を裂いて横糸にしたフィンランド伝統の織物▽サーメ＝北欧の最北、ラップランドの先住民▽ウッラ＝サーメ・ヨイクの歌手。トナカイと共に暮らしているという▽アンドーラ＝映画館。アキ・カウリスマキ監督の経営▽キートス＝フィンランド語の「ありがとう」。